

観 測 案 内 (12月)

木 邊 生

編輯係りから、望遠鏡を持つて居る方方の爲めに、少し變つた毎月案内を書く様に要請を受けた。以前故中村が「観測帳」と云ふのを戴せられて居た事がある。今再び其れを真似る事になつたのだが、少し型式を變へて、特にアマチュア1の観測者中心にして行きたい。暫く拙筆を運ぶ……………

12月 野も山も木枯に吹き荒され、中部地方より北の山山や北海道は已に雪に蔽はれ、やがては全国的にも白雪を迎へる。急速に寒さを感じて、夜間の観測には防寒が必要となる。5度以下の風のある日は、手先がシビレて来る。其れが0度に降ると、無風でも辛い。

天候 氣壓配置が西高東低であれば、「空つ風」はあつても、表日本は概して晴れが多い。黄海邊に出来た低氣壓が日本海に出ると急速に發達して、其れがオホーツク海に抜ける頃には、立派な大陸旋風に迄成長する。すると北滿の高氣壓との間に30—40ミリ以上の氣壓傾斜が出来て、猛烈な西風が吹き付ける。裏日本では山間は勿論の事、月の半ばを過ぎると平地まで暴風雪となつてしまふ。日本海沿岸では此處2、3ヶ月は望遠鏡に親しめない。

シーイング 悲觀すべき状態にある。5以上には減多にならないだろう。然し星の冴えは秋に等しい。且つ、露(霜を含めて)は反つて風があるために減少する。だから寒いさへ辛棒すれば、變星や流星の観測には適しやう。

太陽 9—10月には一時的の極大に達したが、12月には寧ろ、一時的に減少するのではあるまいか。日中もシーイングは悪い。時に雪雲の通る頃は齒の缺けた鋸で切つた光球の様になる。太陽が南を素通りするから、観測者は9—10時頃までに一應狙ひを付けて置くがよいだろう。

遊星 金星が宵の明星らしくなる。然しこの星も南の方に遠慮して居るから観測好機と迄は行かない。土星は再び輪が消失する。算定は日本時間では29日である。この日から太陽は輪の面を南へ移る。恐らく5cm以下の望遠鏡では、20日過ぎになると見難くなつて来るだろう。10cm級ならば25日迄は、見るのにさして困難ではなからう。

小遊星 10等以上の明るいものが6個衝に来る。即ち 5, Astraea. 89. Julia, 11. Parthenope, 79. Eurynome, 10. Hygiea, 4. Vesta である。Vesta は12月

31日衝となり、光度は6.9等。位置は左記の通りである。

日 附	赤 經	赤 緯
12月10日	7時 2.7分	+20°54'
18日	6 55.6	21 24
26日	47.2	21 55
1月 3日	38.2	22 27
11日	29.4	22 57
19日	21.4	23 25

この表によつて、一度も
Vesta を見た事のない人は
見て置くのもよからう。

變光星 新星が5個も10月には揃つた。内2個が本邦で發見されたのは喜ばしい。10月末の様子は

Nova Her 依然7等級。色青白い。スペクトルは星雲線のみ明瞭。

Nova Lac. 急に減光中。9等に降つた。連續スペクトル消えかかる。

Nova Aql I この星は幾分變則である。7—8等。減光は遅い。

Nova Sgr 減光急。8—8.5等。

Nova Aql II 8等。輝線既に明瞭。以上4星は橙赤色である。

ミラ 10月下旬極大。約3.3等。12月には減光中だが、未だ5等位だろう。この星はスペクトル型は M。詳しくは M6, 更に正確に云へば M6ev である。e は輝線のある星であつて、輝線は新星の占有物ではない。其れも、O、や B の、若い、高温の星ならばともかくも、A, F, G, K, には殆んどなくて、M, N, S の赤い低温星には可なり多い。ミラは其の代表的な星である。所が其上この星は光度が變ると共にスペクトルも變る。即ち v と書くのがそれである。敢て變光星に限るとは云はないが、このスペクトルの變化する星は、近時觀測の好材料に祭り上げられて居る。何故光度變化をするかは、表面温度の變化に依る事は解つても、視線速度の變化が δ Cep 型星と反對である事や、この低温での輝線を如何に説明するか、難關は今だに横はつて居る。猶ミラは巨大なそして稀薄な星だが、10.5等の白色矮星の伴星を持つて、其れがシリウスの伴星以上に高い密度である等、どこまでも興味深い星である。この星は離角0.9秒角、スペクトルは B8。

最後に昨年12月の記録。

平均気温 6時 +2.4°C 21時 +4.0°C

平均雲量 6時 5.2 21時 6.4

太陽黑點 1日平均相對數 76.2。觀測日數 24日。無黑點日 0。(以上)